シリーズ 収蔵資料 15

ニュースパーク（日本新聞博物館）は今秋、新聞漫画展（仮称）を開催します。「シリーズ　収蔵資料」は３回にわたり、新聞漫画に関する話を交え、関係の収蔵資料を紹介します。

新聞漫画①

日本の新聞漫画は、江戸時代末に始まります。１枚絵で、「ポンチ」と呼ばれていました。横浜で発行された風刺漫画雑誌「ジャパンパンチ」の「パンチ」が、その由来です。「江湖新聞」第２集（慶応４年）は、「西洋戯画ポンチ之図」として、ポンチを「判じ物」と紹介しています＝**写真１**＝。

ポンチの特徴は、判じ絵的な技法の絵と、余白を埋める音読向きの文とで画面が構成されていることです。

「團團珍聞」第31号（明治10年）は、「ヤット負カシヨ薩懲（さっこら）サ」という漫画を載せています＝**写真２**＝。征韓論で西郷隆盛らが下野した際、岩倉具視と三条実美が態度を二転三転させたことを風刺しています。絵は岩倉・三条をダルマに見立て、文中に歌舞伎「いざり勝五郎」をもじった歌を盛り込んでいます。音読を念頭に、絵と文とで諷（ふう）しているのです。戯作者や浮世絵師が錦絵や瓦版の手法を持ちこんだ、と考えられます。

しかし明治20年代末、写実的な絵で諷する形への変化が決定的になります。文字数は減り、文体も黙読に合うものになります。新聞の発行部数が飛躍的に増え、だれにでも理解できるものが求められたのです。

それを明治28年、「時事新報」で風刺画を描いていた今泉一瓢（いまいずみいっぴょう）は、「漫画」と名付けました。「漫画」が、カリカチュアの訳語として使われた最も古い事例とされます。

一瓢の後任として「時事新報」に入った北沢楽天（きたざわらくてん）は明治35年、紙面１ページの漫画特集「時事漫画」をスタートさせます＝**写真３**＝。この成功が、明治40年代にかけ、漫画という言葉を表題に使った作品集を数多く生みます。その担い手は、東京美術学校の卒業生を中心とする画家になっていました。

写真１　「西洋戯画ポンチ之図」
武器商人を除き、商売が成り立たない様子を描いた風刺画

写真２　「ヤット負カシヨ薩懲サ」
（やっとまかしょさっこらさ）
「團團珍聞」は明治10（1877）年３月に創刊された週刊の風刺漫画雑誌

写真３　「時事漫画」第１回
（「時事新報」明治35〈1902〉年１月12日付）
「時事漫画」は、毎週日曜日「時事新報」に掲載された